

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】松原 康介

【所属】(助成決定時)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

【研究題目】

中東三都市の保全・継承において日本が果たした役割に関する研究

【研究の目的】

中東地域には、数千年といわれる起源を持つ歴史都市が多く存在するが、現代においては老朽化や過密化等の都市問題に直面しており、いかにして保全・継承していくかが重要な課題となっている。

中でも、ダマスカス、アレppo(以上シリア)、ベイルート(レバノン)の三都市は、中東地域の代表的な存在である。そして、誇るべきことに、この三都市の保全を目指した都市計画を6、70年代に実施したのは、日本出身の国連専門家・番匠谷堯二であった。その業績の概要は、近年になってようやく筆者らによって解明されつつあるが、いまだ年譜的なものに留まっており、都市がいかに継承されてきたのかについて、計画図や空間の実態から具体的に検討されているとは言いがたい。

そこで本研究では、これまでの経緯を歴史的に検討し、中東三都市において日本が果たした役割を明らかにすることで、よりよい保全と継承の指針を見出し、今後の国際交流・協力に基づく都市計画のあり方を構想することを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究は、大きく、(1)文献解析に基づく歴史研究と、(2)実測・ヒアリング等のフィールドワークの2つの方法を段階的に組み合わせて実施された。

(1)歴史研究では、20世紀以降に実施されてきた近代都市計画に関する資料を分析した。資料として、国や県、市等の策定主体が公開している実際の都市計画図と都市計画解説書を中心に、計画家や関係者が残した論文や私文書、当時の不動産売買の記録や新聞・雑誌記事等を対象とした。計画の目的と手段の精査や、各計画図の都市地図や航空写真との照合による実現実績の概況分析など、計画実現のプロセスや当時の社会的反応の解明を狙ったものである。

(2)フィールドワークは、歴史研究を受けて、歴代の都市計画が実際の都市空間にどれだけ反映されてきたのか、その実現実績を詳細に検証した。特に重要な道路計画や街区計画を対象に、新たに作られたものや喪失されたものを実測から厳密に確定し図版化した。またヒアリングから、住民や管理者らの利用実態を探った。たとえば、オモテの近代道路沿いよりもウラの路地が繁栄している箇所や、近代化されながらもアラブ的に利用されている空間等は、いわば歴史都市の活力が未だ尽きていないことの証である。近代都市計画と歴史都市の間を埋めるもの、あるいは両者の融合の形態を見出すことを狙った方法論である。

実施においては、(1)では、歴代の計画図を当時の都市地図と照合し、計画と都市の変容の関連を解明した。また、(2)においては、(1)で見出された計画による変容の要衝、たとえば近代道路と歴史的な街路網との接続地点について、沿道に建設された近代アパートと、その裏側に残存している商店街等の実態的な状況を実測から図版化し、更に近代店舗と歴史的店舗の比較、車と歩行者の関係、近代的に建設されたモスクなどについて、ヒアリングや観察から明らかにした。

【結論・考察】

中東三都市の保全、継承について我が国が果たした役割は、以下のように総括できる。すなわち、国連専門家として各都市の都市基本計画を策定した番匠谷堯二の計画は、それまでのフランスによる合理主義的な都市計画の方針を転換し、旧市街をできるだけ保全しようとするものであった。とりわけアレppoの都市基本計画においては、先行する計画に見られた旧市街内の道路計画の多くを削除した上、旧市街への自動車の侵入を大幅に制限するよう計画を修正した。以後、日本の国際協力が最も影響を与えたのはダマスカスである。ダマスカスにおいては、OTCA 及び JICA が、70年代より

現代に至るまで、専門家の派遣や技術協力プロジェクトの実行によって都市の保全・継承に多大な役割を果たしている。その際重要なのは、旧市街そのものが歴史的に蓄積してきた、ゆっくりだが持続可能な発展のプロセスを、フィールドワークから評価して、これを出来るだけ現代の都市計画の中に活かすことである。